［別紙 2］

審査の結果の要旨

氏　名　　康永　秀生

本研究は，仮想評価法（contingent valuation method, CVM）を用いて乳がんマンモグラフィー検診の便益評価を行い，マンモグラフィー検診について良い結果に関する情報のみを与えられた群と，不利益に関する情報も加えた十分な情報を与えられた群とで支払意思額（willingness to pay, WTP）の推計値を比較した論文である。仮想評価法を用いて乳がんマンモグラフィー検診の便益を測定した研究は本邦ではこれまでに例が無く，日本人を対象にした調査は本研究が初の試みである。また本研究のように，保健医療サービスにおけるインフォームド・コンセントの内容が WTP に与える影響について明らかにした研究は，本研究がほぼ初めてである。

がん検診の重要性やインフォームド・コンセントのあり方について，国際的にも国内的にも重視されている状況で，本研究のテーマは時宜を得ている。また，本邦ではまだほとんど実施されていない仮想評価法という手法を用いている点も意義が深い。本法におけるバイアスや限界についての検討も，検討されている。研究結果から導かれた結論も十分に妥当である。

研究により判明したのは以下の諸点であった。

（１）日本人 50 歳代一般女性の乳がんマンモグラフィー検診に対する WTP の平均値[95％信頼区間]は1,634円 [95％信頼区間1,455-1,812円]と推計された。

（２）乳がんマンモグラフィー検診における偽陽性などの不利益情報を与えられた群の WTP の平均値が 1,418 円[1,209-1,627 円]であったのに対し，それらの情報を与えられなかった群の WTP の平均値は 1,850 円[1,563-2,136 円]となり，統計的な有意差を認めた(p=0.020)。

（３）ワイブル回帰分析の結果，情報量の多寡，がん家族歴，マンモグラフィー受診歴，健康への関心度，世帯年収が，WTP に影響を与える有意な要因であること示された。

本研究では仮想評価法におけるバイアスなどの問題点について文献的考察に基づき検討されており，それらバイアスを回避するために研究デザインの段階から工夫を凝らし，可及的にバイアスを最小化することに成功している。その意味で，この手法を用いた先行研究の中でも類を見ない質の高いWTP評価結果が得られている。

良い結果に関する情報のみを与えられたグループのWTP値は，マンモグラフィー検診の真の便益を過大評価したものと考えられる。一方で，不利益に関する情報を与えられたグループのWTP値こそ，マンモグラフィー検診の便益をより正確に計測したものと言える。両者の差は，偽陽性に起因する女性たちの不安(anxiety)がもたらす便益の低下に相当する。しかしながら，不利益に関する情報が死亡率減少効果による便益をすべて損なうものではない。女性たちは偽陽性などの不利益に対する不安があっても，一定程度の価値をマンモグラフィー検診に見出すものと言える。

乳がん死亡減少のために，マンモグラフィー検診の受診率を今後さらに向上させなければならない。一方で，がん検診のインフォームド・コンセントのあり方も検討を重ねる必要があることが，本研究では示唆されている。

以上，本論文は，乳がん検診に対する経済評価において新しい手法を応用している点で独創的であり，その学術的意義は高く，本邦での医療経済評価に関する研究の今後の発展に貢献するものと考えられ，学位の授与に値するものと考えられる。